
山のふもとのマイスタージンガー

かせいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山のふもとのマイスタージンガー

【Nコード】

N1597F

【作者名】

かせいち

【あらすじ】

居場所がなくなる痛みの話。よくわかりません。

僕の家は山のふもとにあつて、そこからは海がよく見える。

水平線は峰より高く、視界を遮るものなんか何も無い。

いつの日か君を連れてきて、ずっと一緒に眺めていたい。

僕だけのとっておきの景色。

山と山とに挟まれた、谷という空間。東の山のふもとに小さな家、その前で春雪はバイオリンを弾いている。

彼のいちばん好きな曲、パートはファーストバイオリン。

重厚な弦楽から始まって、セカンドバイオリンと一緒にメロディ、金管のアンサンブルが入ってきて、ベースがメロディーを受け継いだら、…頭の中で曲をたどる。一音一音を丁寧に、連符のスラーが途切れないように、走らないように注意して、ここの旋律はフォルティッシモ、ビブラートを上手に効かせて、ピッチが崩れないよう気を付けて……

やがてよみちが現れた。彼のいちばん好きな人。

こんにちは、春雪。今日も練習がんばってるね。ここで聴いててもいい。

春雪は笑ってうなずいた。目を閉じて弾き続ける。幸せな時間。

いつの日か君とここに住んだら、いつでも聴かせてあげれるよ、だから、

いつの日も言えずに終わってしまう。

ねえ春雪、どうしていつも家の前で弾いてるの。よみちが不意に訊ねてきた。

春雪は答える、僕はこの場所が好きなんだ。この景色の前で弾く

のが好きなんだ。見てごらん、水平線が山の峰より高い位置にある。ずっと遠くにある海が、僕らを包んでいる山すら越えて、山のふもとからでもよく見えるんだよ。海を背景にそびえる山と、山を覆うような水平線と、このふたつが同時にある景色、そこで大好きな曲が弾けるなんて、大好きなバイオリンが弾けるなんて、とても素敵だと思わないかい。

よみちも一緒に空を眺める。本当だ、素敵な風景ね、その曲にぴったりね。ふたりとも笑顔だった。その上君が傍に居るとなると、これほど素敵なことは無いんだよ、ねえよみち、だから一緒に、・・・
・今日も言えずに呑み込んでしまった。

ところで春雪、さっきから弾いてるその曲は、一体何ていう曲なの。

これかい、この曲は、

僕の家は山のふもとにあつて、そこからは海がよく見える。水平線は峰より高く、視界を遮るものなんか何もない。いつの日か君を連れて来て、ずっと一緒に眺めていたい。僕だけのとおっておきの景色。

山と山とに挟まれた、谷という空間。西の山のふもとに小さな家、その前で夏秋はバイオリンを弾いている。

彼のいちばん好きな曲、パートはセカンドバイオリン。

重厚な弦楽から始まって、ファーストバイオリンと一緒にメロディー、金管アンサンブルが入ってきて、ベースがメロディーを受け継いだら、・・・頭の中で曲をたどる。一音一音を大切に、連符のスラーが転ばないように、遅れないように注意して、ここの旋律はピアノツシモ、ビブラートをきれいに効かせて、ピッチが外れないよう気を付けて・・・

やがてこみちが現れた。彼のいちばん好きな人。

こんにちは、夏秋。今日も練習がんばってるね。ここで聴いててもいい。

夏秋は笑ってうなずいた。目を閉じて弾き続ける。幸せな時間。いつの日か君とここに住んだら、いつでも聴かせてあげれるよ、だから、

いつの日も言えずに終わってしまう。

ねえ夏秋、どうしていつも家の前で弾いてるの。こみちが不意に訊ねてきた。

夏秋は答える、僕はこの場所が好きなんだ。この景色の前で弾くのが好きなんだ。見てごらん、水平線が山の峰より高い位置にある。ずっと遠くにある海が、僕らを包んでいる山すら越えて、山のふもとからでもよく見えるんだよ。海を背景にそびえる山と、山を覆うような水平線と、このふたつが同時にある景色、そこで大好きな曲が弾けるなんて、大好きなバイオリンが弾けるなんて、とても素敵だと思わないかい。

こみちも一緒に空を眺める。本当だ、素敵な風景ね、その曲にぴったりね。ふたりとも笑顔だった。その上君が傍に居るとなると、これほど素敵なことは無いんだよ、ねえこみち、だから一緒に、・・・
・今日も言えずに呑み込んでしまった。

ところで夏秋、さつきから弾いてるその曲は、一体何ていう曲なの。

これかい、この曲は、

ある日谷の真ん中に現れた、四角いくすんだ白色の箱。

それは山よりも水平線よりも高く、視界は突然遮られた。

どうしよう、僕だけのとおっておきの景色がなくなってしまう、>

春雪は驚いて慌ててバイオリンを持って、東の山のふもとの小さな家を飛び出した。

夏秋は驚いて慌ててバイオリンを担いで、西の山のふもとの小さな家を飛び出した。

春雪が箱へやって来ると、そこにはバイオリンを担いだ男がひとり。

夏秋が箱へやって来ると、そこにはバイオリンを持った男がひとり。

こんにちは、君のそれはバイオリンかい。

こんにちは、君のそれもバイオリンかい。

こんなところにバイオリン担いで何しに来たんだ。

君こそバイオリン持って何しに来たんだ。

わからない。ただ、居ても立ってもいられなくて。

僕もだ。気が付いたらここに来てしまっていたんだ。

2人は何も言わず、同時に同じ行動を開始した。
何するの。

箱のてっぺんに行くんだよ。

僕もだ、僕だけのとっておきの景色を取り戻すんだ。

僕もだ、てっぺんに行ったら、何かあるかも知れない。

2人は箱のてっぺんに登った。そこは風が強く、太陽が近くにある、目も開けられない。

海は見えるかい。

見えない。山は見えるかい。

見えない。

景色、なくなった。

.....

.....

・・・ねえ、君何の曲が弾ける。

君は。今何の曲を練習してる。

せーので同時に弾いてみようか。

じゃあ、行くよ、せーの、

2人はバイオリンを取り出した。春雪はファーストバイオリン、夏秋はセカンドバイオリン、他の楽器こそ無いけれど、2人の中には立派なオーケストラが鳴り響く。

重厚な弦楽から始まって、2人で一緒にメロディー、金管アンサンブルが入ってきて、ベースがメロディーを受け継いだら、・・・頭の中で曲が歌う。一音一音を丁寧に大切に、連符のスラーが途切れないように転ばないように、走らないように遅れないように注意して、ここの旋律はフォルティッシモでこっちはピアノッシモで、ビブラートを上手にきれいに効かせて、ピッチが崩れないよう外れないよう気を付けて・・・・・・

その時突風が吹いた。箱のてっぺんの風は2人には強すぎた。風

は2人をあおり、空へと飛ばした。

途端に世界は真っ逆さま、とっさにバイオリンを腕で包んだ。空が足の下に広がって、まるで海のようなだった。

瞬間、彼らの目にはあのとっておきの景色がはつきりと浮かんでいた。

ああ、ずっとふたりで眺めていられると、思ってた、

大好きな人と、大好きな景色の前で、大好きな音楽を弾いて、いつまでも一緒に暮らしていよう。

幸せな夢もろとも落ちて行く。

よみち、愛してるよ、

こみち、愛してるよ、

ある日彼らの前に現れた、四角いくすんだ白色の箱。

それは山よりも水平線よりも高く、視界は突然遮られた。

春雪は東の山のふもとの小さな家を飛び出したきり、帰ってこなくなつた。

夏秋は西の山のふもとの小さな家を飛び出したきり、帰ってこなくなつた。

よみちは春雪のバイオリンを抱えて、家を出た。

こみちは夏秋のバイオリンを背負つて、家を出た。

よみちが箱へやってくると、そこにはバイオリンを背負つた女の子がひとり。

こみちが箱へやってくると、そこにはバイオリンを抱えた女の子がひとり。

こんにちは、あなたのそれはバイオリンですか。

こんにちは、あなたのそれもバイオリンですか。

こんなところでバイオリン背負つて何してるんですか。

あなたこそバイオリン抱えて何してるんですか。

わかりません。ただ、居ても立ってもいらなくて。

わたしもです。気が付いたらここに來てしまっていたんです。

2人は何も言わず、同時に同じ行動を開始した。

何するんですか。

弾いてみるんです。

わたしもです。あなたは弾けるんですか。

いいえ、弾いたことなくて。

2人はケースを開けて、バイオリンを取り出した。

持ち主の居なくなつたふたつのバイオリンは、弦が飛んで、欠けたりヒビが入ったりしていたが、それでも原型を留めていた。地面にたどり着く瞬間まで、ぎゅっと抱き締めていたからだ。

それ、ボロボロですね、どうしたんですか。

あなたのも傷だらけですね、どうしたんですか。

．．．．．

．．．．．

．．．ねえ、あなたの大切な人は、何の曲弾いてたんですか。

あなたの大切な人は。何の曲練習してたんですか。

せーのと言ってみましょうか。

じゃあ、行きますよ、せーの、

ニルンベルクのマイスタージンガー！

2人はくすくすと笑い出した。

おんなじですね、何もかも。

本当、おんなじですね、全部。

肩を震わせて、か細い声で笑いながら、2人はポタポタと涙を落としていた。

本当、バイオリンを愛してたんですね。

本当、あのとおっておきの景色を愛してたんですね。

春雪、わたしも、愛してるよ、

夏秋、わたしも、愛してるよ、

四角いくすんだ白色の箱がそびえ立つ前で、壊れたバイオリンを持って、2人はいつまでも泣きながら笑い合っていた。

十年後、山のふもとから見える景色は、ただ連なる箱ばかりになる。

僕の家は山のふもとにあつて、そこからは海がよく見える。
水平線は峰より高く、視界を遮るものなんか何もない。

いつの日か君を連れて来て、ずっと一緒に眺めていたい。
僕だけのとっておきの景色。

君と僕、ふたりだけのとっておきの景色。
ずっとふたりで眺めていたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1597f/>

山のふもとのマイスタージンガー

2010年10月15日09時59分発行